現実の複雑さの中へ

山田清三郎

サークル誌評というのはけっこうたいへんな仕事であるのよむのはたのしいのだが批評の筆をとるとなるとく作品の数は少なくなくスペースはかぎられているので意のあるところをわずかな言葉で作者にどうわかってもらうかという苦労がありまたその作品をよんでい